青山御流
活花手引種前篇
一

青山御家流

桂月園泰雅先生著

# 活花手引種前篇

京都　大谷津逮堂藏

## 自序

蓋聞天者缺酉子地者不滿卯午方圓險夷共屬乾坤萬物爲其氣被覆載而自象乎其形是以爲插花之體也高低斜正則南北之極長短屈伸準陰陽之度量以爲左右前後輕重繁瘦之繩墨而糺本末早晩之等上翫于公宴加乎佳節慶賀之式下備于賓客之禮夫非情之於有情也守眞保壽與於菓

實花葉形狀將資浩然之氣養神慰意乃是花木不言之妙榮枯盛衰移於四序之變化濃淡疎密隨于山川風土坦然莫與物爭焉雖告諸人人獲之未必樂焉耳目徒惛昧于名聞而心身亦奔走于利途嗚呼人者三才之一而非霊物之長哉頓覺此意則茅檐藪棲坐均于僊界無誓言而緣于神明佛陀弗學而遊君子之藩籬矣原夫故

正二位大納言藤原基衡卿　公務之暇尤留意於此伎濫觴于青山流溢于海外嘗羽翼於規準本諸三教配諸五典其條律全具矣譬授于人得一枝則求性而示順逆之理作一瓶則繫乎邪正得失來由以述善否之故擬禮讓敎諭敬和之道焉　余　汲其末流奉首肯初設會筵於東都弘其風於丘里爾來同好數百學習積久略達其義者居多焉遂承　園公命不擇貴賤士婦集所插之花狀一百瓶而號活花圖大成往年

上梓布乎世雖然或其花様繁茂則意味不淺而畏初學難辨明於是同社某專欲請捘容易頻來從史故再蒙　今園公旨撰其出據隨大小講增減應屈伸分表裏加之就幼學所挿之體直以模倣焉省有餘補不足所換入之始末併圖之鏤梓備便焉苟將掬　青山之滴輩勿論都鄙遠近秉家務餘力依此集圖學之則林野之景色河洲之意態迎模於一卉一枝貯于瓶裏粧于席上觸香對艶則雖暫時手技其娛豈盡乎斯哉

東都桂月園吉尾泰雅謹撰

寛政十二庚申年

孟春穀旦

# 活花手引種凡例目録

巻の一

○立花箇條圖繪部分の事

○傳説大要箇條の事

○花形仕立並瓶中善悪の事

巻の二

○五種花形同様方並花形の事

巻の三

○稽古花形並倭漢異名等の事

○即興花形並花形名等の事

○床飾附書院の器物繪合花形圖の事

巻の四

○同社花形競争圖繪の事

巻の五

○總傳箇條奥書目録の事

○四季花園指並書道極意手當の事

○花道大意擴說問答並生活挿字義通俗の事

目録畢

三枝四所拠当の事

○凡花形の一体上ニ三の堂を立ル栽相の三枝を居下ニ三偶の位を並中央を客位となして大小曲直ニ随ひ疎密長短ニ応し三枝ニ形し五枝ニ備へ七所ニわけて出生の自然ニ則り体用変化をなすこと是妙ハ奥の図ニ依て弁明すへし

花ハ供養の第一賓客の先へきる事

○花道代々妙客たりとも不言にして観諫の徳なく教令を詩ひ導き其心をひらかしむ人甚ひく思ひ邪なる人ハ則異悪なる時ハ天然善ニ祥を興く至ル実を為神仏ニ捧けて供養の第一賓客ニまて賞翫の最初より尊重せよとある床の飾りとなせハ流て枝葉の塵埃を払ひ或ハ虫の巣蛛の糸枯葉萎花ホを取捨水ニ濯き露をもたせ器花清浄なるへし或ハ席上ニて客へ一瓶を呈ス余ハ他ハ花を賞する者猶同意之

礼義を正して花入置き事

○花ハ神仏ニ備へ高位貴人ニ奉る為の飾なれハ先礼義を正し入置き事なり然ニ独楽放情の悪ミをなしても彼の賤子三枝の礼儀あり華ハ流ついて気府を含むる職既ニかくのごとし鬼神ハ常ま生るも其形を顕し玉ハ花実未きこゝ次花

そのいはれバとて必ず秘義と漫にいふべからず

花形正風并を専とすべからず

○次第ハ正風を専と以て出生花の巧なる体を好み或ハ真花の器を求め又自己の未熟なるも憚らず猥りに人の花に批判を加へ或ハ他を謗し其ハ器物の景気に拘り名聞に陥り或ハ義理を飾り多作を越。足事を弁へざる者ハ皆花神の冥に叶ふ所にして此序の執筆の甚しきなるべし是等の趣ハ初心より初心者に記せし所故実を富に作る時ハ猶へをしかるべきや

稽古に前後の次第あるべし

○花を挿ふの次第ハ先殺活の名字を初として瓶中に納ることの



工夫専一之其執行ハ出生性を専として是ぞ来るの術也然して瓶中に能居る時ハ其風情成易く出生に自らかなふよ然し妙なるに何程出生を求むとも瓶中諫なる所ありとも又枝葉を撓るハ一旦其性を悩むる様なれども術を尽せハ長く出生を助くるなり稽古の始めより強く出生のせんさくと枝葉花を惜しきを除く事を厭ふ時ハならず猶も其場を得得して生涯花をさすことなり是を道に捧て順を経伝の伝なり

二種取合物の事

○二種三種取合せるハ大抵木に草を取合とあり或ハ草に草

木ニ木を添るもあり又高キ低き強き弱き濃き淡き赤き白き
色なとも色変る物を取合べし但山木ニ草ニ実ニ実の類花
葉ともにおもはる物を交るハ色々なれど省畧の図を考へし

花形淵深の事

○花形ハ基志けりなむよりハ満し過たるよし枝葉満たらむよりハ
あけたる不ニ余情なし花も開きたるよりハあまり花をすくなきゆへしぼ
風情なし惣じて花ハおくしてあまるよりハ二三分にて其一ツを
木あげ葉隠すなるゆへハ省略の何をあり

真行草三体九変の事

○真ハ正しく直なる姿を云行ハ斜に横たへて体を云草ハ靡くなど
見る指をいふ右三体分れて九体となる所謂附あけ後ろげ像とし
中より表より裏より扨隠ならひき前より後より等なり
但花形ハ高さも瓶三長ニ過べからず以下低き物ハ其ものに任ス

花瓶善悪の事

○器形ハ古き指ニ高く水ふかく深くして深きを好又ハ唐物像物
とも不出来のあらさる器ハ用ゆへからず或ハ馬盥擬古盥の類なり
陶器又ハ飲食の具抔ハ聊も遠慮して惣じて草茎木根も毒あり
挿ニ備しもあれハ毒草なく枝ばって挿ニ根茎を口ニ入事あり次

朽枝破葉指用ゆるに場所ある事

○朽枝破葉蔓葉抔も花形の様振よろしけれハ時節に随ひ命ヶ常
猶楽等にハ尓用る場あり池西茶渡抔に並へ正面木に頭にて見ゆるハ
悪し何れ花葉枝ともに奇麗なるによろし

形状花葉文質ある事

○花葉文質とハ樸質ハ花ハ質にして人體の如く葉ハ文にして衣
服のごとし花葉互不及ある時ハ花状に野鄙の失あり花葉
より繁き時ハ質なり葉。花より繁き時ハ偏なり形状も尓然に出生の
体なる時ハ山林野州にして卑し拍採ある巧に過るハ体なくして
剪練花なり是等の境を能く心得べし

手つるある器に活る枝葉の事

○篭の手桶の活る。又ハ釣瓶のたぐひ抔手枝葉木あらき清かさけるハ
勿論さなくとても つるともまり手をつるぬき或ハ取り遠く抔ぞ
偏てつゆる数ハ直都活む様しらひ心得ある事後への巻に出
の図を互考すべし

祝儀向等の差別心得の事

○祝儀向ハ勿論貴人才招請抔の花ハ先大凡ハ蕾茎渡れ咲時節
たらしさる物とせざるこそれ葉の数又ハ名悪く色香無かりさる物或ハ

異花輕葉枝また於まるみ葉将枝末と滴り尓總てしほれたる落
易き物抔ハ用ひざる也尚祝儀の筆尓限く心得傳ふべし

## 掛物尓對する花形の事

○掛物尓掛らる花ハ繪の貴賤を主として花ハ是尓准ふべし
係て畫の奇麗とする所ハ句論統く樣絵なかめ要起所ハ藤ひさく
爲ざらしむ形り花實を以て補ひ備つる數ハ多し故枝葉猶なるもの
白地尓備るハ格文あり此外心得傳ふべし

## 書院並鋪向と茶室の花心得不同の事

○書院座敷の花ハ別席の饒なる故浮澤尓豊なると專要とは
當物も亦是尓准ず茶室ハ唯幽棲雅趣を主として目ひく
ぶるふ花も是尓應ずる物也

## 花見る心得の事

○床尓飾る花ハ床上の景尓物尓より腰の物扇杯ハ殺す若し其座
尓貴所の座花より二疊程隔離て見るべし又主人の許あらバ椅子尓寄の
下へよるへし此組集會席抔ハ坐亦貴賤の分で品等可なるべし
右十六箇條ハ傳書の内僅尓十分一を抜出て其道場を記ば尚
諸流の奥義ハ採出ぬとなるハ都鄙遠近貴賤尓限て博流
傳達の人々も傳あれば夫々につきて學び出べし

# 十一ヶ条忌嫌ひの図

葉ある物をかく花ばかり生ハ嫌し　但
花多くて葉なきハ杜若なんど抔ハ
まゝ荻の葉抔のまぜまる事をかりて
補ふハ苦しからず

かく水仙など後葉のそへて面白形の
物もあれども花より葉まへハ悪し　但常葉
或ハ花末葉まる葉出しの若葉又ハ花
終て後も葉の残りしを物をよき見
等ハあらい枝ニ用ハ苦しからず

かく大輪を俤く生ハあし　但前ニ
支葉ありて其くらし添ひげ枝ニまじく
見まるハ苦しからず

何ニ限らず後かく竪横ともに
小長をくらぶるハ悪し
但一方开ひく事間遠きハ
苦しからず

かく左右同所より出て引
張まるごとくなるハ悪し
但厚薄ありて前後左
右長短ある時ハ苦しからず

かく見きり十文字に置ハ
悪し但支枝の先にて聊
さきり或ハ目にたゝぬ小枝
小葉ハ苦しからず

かく鏡のごとく花葉枝を
平にそゆる事悪し但
うらへ小葉小枝ハくるし
からず



かく前後へ出ることあるべし
除さし又ハ勝手にあらず但活花
寄へたとへつよふ出るハ
苦しからず

新花葉水ぎわより或枝を
通すことさきにさしたるハ悪し
但花葉有る間にして器の
ふちにつれて出るハ苦しからず

かく月の輪なるハ
ふちにさはる類ハ
あし

かく四ツ以下偶数ハ悪し
四六八十なとの双数なく但茶と
花苔相合しイてうよなれハ
苦しからす

新ノ花実枝なとのうち或ハ
二本ツ並ハ悪し但上実と
下葉ト出不足ハ苦しからす

又新ニ一枝の元を生さす
せまるこゝろへあるハ悪し
松右木友草ハ苦しからす

かくのごとくに行列雁行
揃挿のこゝろあるハ悪し
但前後上下の津流あれハ
苦しからす

かく草にて木を裹ミ又
木にて草をつゝむハ
悪し 但一方通用物ハ
苦しからす

右ハ杉形し

如此前より深く廻し後より前へ廻すハ悪し但つるの類からみあるハ其なりの茎の細くやせたる物ところどころへきたる所まて扱へむハくるしからず

かく瓶の正面を無ひ隠すハ悪し但平瓶砂鉢杯の向のかゝるハ苦しからず

右是迄ハ禁十ヶ条の太嫌ひの部なり也

花配り撓枝葉撓めのごとく木槿桃萩杯その外何にても花形あしき枝を茎根の多い小指し杉葉まてハ琴柱のごとく割り或ハ其侭の枝にて用へし又茎形の趣をおもてかく貼くつけてもよし

かく瓶中入り隈をハ花配りとなり結し図のごとく中へ薄板を添しくびれたる所にて花留とし押へ置し器に応て考用へし何れも如斯の器ハ茎留かくし直なるにちなみて

如斯金物にて挟ぐるは手軽に此に板を打つけて手角く又ハ一面に小石を中石をのせおきしてもよし

又しかく鉢一ツへ中まで人に薄板を入其く此を添し上木もみ出し小石利とおかして仕方あるべき

圖る所の七枝ハ花葉枝の多少長短ニ随ひ謙退屈伸ニ應し三枝ニ配り五枝ニまとめ或ハ七所ニ備ふ高出生の模様ニ随て魚帯増減ニ心得傳あり

草木各出生の大小ニ器ニ随ひ上乃七枝内の何れの三枝ニ合せとも相近き枝ニ配ひし高下左右従横表裏自然ニ任せ変化時宜ニ乗じて見ますべきなり深く秘伝ある此意をよく取扱ふべきことなり

前不同
前不同
前不同
前不同
前ニ同
前ニ同

草木何に限らず根茎
如斯右往左往に曲る
ゑるゝ時ハ水中あしく
水際添けばして花
形居ゟ次尚次とえへし

如此腰水中ともよく
搦ふ様に揉て入るべし
水際ゟ見込して見る入べし

如斯大小よく揉ふといへとも少り
枝遂なる㕝水中と留りかぬる也
切左の通り揉べし

かく揉ゑたれどもふとき
ものハ之れなし切手の如く
水に入る所を鋸まて挟めと
へ見せへてきむべし
水上ハさへへ見ハ
よし

右五種の花挿入挿方ハ梅椿茶牡丹水仙の五品是ハ世ニ多く
然も盛り久敷時ニ携ひて他流も流派の取上ケ五方ニ
より扱ひさる所なれと当流ハ此五種の勢ひを旨として余ハ流執行の
力を以て挿ちこゝる挿方左の如し

かくまじの如く挿へし

○ハ挿む芯の事也

△ハ勢ひ添ゆる事也

壱枝

斯もし此通りに挿へし

斯挿てたいに用るへし

壱枝

かく上下近く挿へし

斯様にして相添へし

右三枝合して押出す

右三枝なる花壇如斯さし入るなり其外自然の
乗し数に随ひ変化あるべし此趣梅のみにあらず諸木共に
当る物なるべく図にあらはすなり

此枝前の方曲りつよく面白けれども
梢延びてこし振りれば添へ居り
ときに悪し前を除て向を用

此枝後の方頻りに屈
曲なれども腰伸て直
なる故前の枝を除き
去るべし外何に限らず
此意をもて推すべし

如此の枝よりもとめて
置かゆれハ左のごとく
変るなり
印ハ枝なる
所之余ハ是ニ
准へし
かく横に出たる太枝を左の
ごとく水に入る所にて小枝の出
ぶりを探て細ぶりをもかゆ
れバ形よく大小変るなり
印の所を探之

椿ハあく風情たくゆに葉並の
薄くミゆるハ悪し迷(げん)ままに陀
繞く椿ハミ木ふとく小枝ニ屈し
出る形なきを添し河ニ椿ハ
相ならること又ハ
各同意なり
次乃挿方の圖ニ
くらし別挿法
巻ニ可見し

如此所ニ葉繁く幹で
多くく挿ハ悪し勿論
さき枝屈曲ニして
水際揃ひがたき
物なりとあく物じ
を三本くらひを限
とさて悪し五本ハ
得くより入悪し

如斯椿ハ多分三枝の
内二枝ハ座まて兼帯
させて其外ハ小枝を
あしらひ小添る事
なし別体奥乃
巻ふ多し



如此枝ハあらく花葉の多き
ハ見悪く取捨あらハ花を一二
輪ふ強く葉を五六枚も残
し左乃通あんばいよく入まじばよ
し茎をかくし葉を厭
時ハ風情悪し根ま
印乃所より
剪べし

如此ハ懸瓶毎ニ
重杯專らし又
置瓶乃ちせ杯かな

如此ハ二瓶
さ小内外の
添方ニ
餘ハ是ニ准
ふし

杜若の風情ハ多く葉ニあるなり圖のごとく乃葉ハ繪形ニてハ
曲すゝて面白げなれども花ニ取合時ハ葉先さつきみだれて
悪し左の如く形るうつき葉の直なるニ志くべし次尚葉の
拵方次ニ出し見るべし

如是元より真直ニ
つき立たる葉宜し

何れ産の待出てハ遣ひ
ゆるく法わりうら葉
ハ多くなし左ニ図の如く
一枚宛もぎ放ちすゝき
左に通長短恰好能
様ニ二枚ニても三枚ニて
もくみよせて元
乃ごとく組合置し最初
ハ致しがたけれど落る
なく出来るものなり
事多し

斯三枚も四枚も組なり
多く中をひきくき場所
相應ニ見合置て左乃長き
葉ハ心の冠葉に組なり

如是の葉ハ懸瓶
添瓶によし

かきつ葉
くみ方

花も曲有るハ面白様なれ共
斯本末共ニ悪しくねり
てハ必水中水上共ニ殊儀
なり総て杜若の茎ハ悪ニ
通りにハまとめならざる
物なり譬本直なりても
左の如く末のいづれほかに
曲あるくハ葉ニ添ざるゆへ

かく末まで順ふて曲
りあるハ葉添ひ
揚しやうにしかき
容も出来るもおゝし
尚遣方奥にくし
何れ杜若の茎ハ
直なるにてハ能し

右の但葉ニ直なる
茎と交ひて如是
に遣ふべし

二本の挿様変化
數多あり沼巻と
見るべし

三本遣前に
同し

三本遣左勝手(ひだりかつて)別体後巻ニ委し

曲花遣方別体後巻ニ数瓶あり

右に同し別体奥ニ

如此の花をも懸瓶(けへい)添へ物水際(きは)麓手杯ニ用ひてよし くはしくハ後巻に見へ侍り

大菊ハ作り方乃功者不功者ふより殊外曲直みへるなり
唯活花ニハ直なるを専要とするなり図の如く撓ふ
くね曲り或ハ三物三段つゝみの枝乃まくみのあく

但中菊ふ至てハ
乃体あるを
麁き
篭挿ふとしてなびけ入
まししハまた面白き
風情あるなり
深巻とて

如此の元ハ直なれども
枝葉開きて外の枝

斯花長短ふ枝乃
まくゑひきし咲り出ふ
出る時ハ何様つけても
も各用たゝ○なり
活花ふ志ある人菊
とつくろふ聊との意
体用ひてもとくひ
まきさゝもなりなり

かく茎の曲りあるハ
各図のごとくなるべし
直し一ツ用ゆ一ツ取捨
そのうちハ大きむれバ
どれ捨まじハ茎葉を
枯ちゆきさも残さなれた
まんじなるれバ折れざる
ものゝ尤節を除けて
捨るにかしく撓むし
但是を撓るに五練一
鉄の口傳あり必
撓るべし

右の二くきうゆる
枝まで三ツ五ツ
七輪まで時宜に随
て入るべし茎揆締く
奥に巻にあり

右小同じ

右一挿つゝまきて二挿つゝと
交へし如是生くし尚別体
深巻に多しこれハ唯大通の
一方といふ

作りまる中菊ね
かく峯山に入まてく
も形累り押合てよ
かなし

かく盃瓶挿す十分なひけて
入まてるもよく移し尚
縁折のこぼれ咲おゝ別てゆらし
小菊挿も同意なり

秋冬の小菊乃大凡
夏の小菊ハ大凡
秋冬小菊
夏小菊

水仙ハふくよれ麗にて直なる形るハすくなきものなり
中より出たる花ハ葉の腰弱く又ハよれるにてなをり
くるしき葉多く宜掛瓶なとにハ花ある葉とつかえて弱く
二もとくらい入るくあるへし格別長瓶ニハ
丈高く数を
入るにハ悪し
次の圖のごとく
直なるを撰ミ
周囲大きに
美悪のある
事也

如是葉強くすぐひとつ目なるを上
宜上と次考へ合べし茎ハちゞみて
のびざるをよしと次

かくよれたるもよしと次として
葉性つよきハ唯ひとつ目ニ
揉なをる形り

右の挿を　ぬける葉も
一枚つゝなくてよろし但そこの
長き葉ハ凹なる所内の短きかたハ凸の所
と人指中薬指の三指に水をそゝぎながら茎葉を
まづハ長枝に刎しあらく元より末迄なく葉に剛柔に
付く五七へくさらきて圖のごとくにあはせまとひ茎
茎もころびしなく葉にあはせ
開ゆべし但葉
余り捻くことに
過ることへ葉
青色ぬけて穢し
艶落ぶる様又茎の
起し様口傳多し



水僊葉挿ハ右の一茎を取あげ白根の所を静かに
ミ又ハ捻(ひね)りて茎根をゆるし花先とさすべきにぬきて
夫より葉をしぼんしよわくして最(と)り性二枚かけかざり折りまた
ゆく多分ハ夫を始終あはせて用ゆべし花ハ花留(とめ)に開
かけ花器又ハ曲あるる挿を遣きさて節に
とちゆる由ハ破まさるる様よの事
と心得べし尤も花
ぐらけのいざる
節ハ三節程よ白
根とせぬより
挿べし

葉捌ハ如是ひろがれど
最上とするなり

斯二ツよ上となる時ハ下さまり
茎形浅し

くしろ様子ぼくハ
かげゆくめぐりて
しめてまわし
遠ところへし

茎葉なるかくあまりに
ろじ乃通ふつくこゝる
こゝろし

水仙ハよく之揃る弥があげまする
かく縄の採みよれるハ手瓶
とも並べくへん合へし

水仙必葉まくせ
あして一様にあ
らさる物之故に右
にの葉組ども能く
左りにも組 左
りと右にある
まり因て左り
勝手の心にて葉組
と二三茎爰に
出して下ふ図の葉
にも此意にて能く
為し先茎を極め
図のめし高次を
見為し別條後
巻に多し

水僊曲葉撓叢増如是懸瓶
置瓶添へ物あしらいは前後
左右時宜ニ応し見計ひ用ゆ

盡信書不如無書と孟子の言辭宜なるかな吾子本草の
學行れてより一葉一花其名審ならざるハ能し然といへ
ども變化の道止まざれハ其説も又止まず各理ぞ解證こ
述つらへ其名も亦一定きざる物あり何ぞや是何の此ことく
書にあつく惑するのミ故に其當説を取て夫ぞこ是といひ
是ともそれとし亦同名異物一種兩名の徒に倭漢異品方言
の中を僅に聞たまへ得たる二三名を揚け役乃卷花
彙の遺に誌して聊此集を數ふ人の便に備ふ見る人不足を
補ひ違へるを改めて是ら幸ひ能し者乎